



兵庫県立但馬やまびこの郷

Web版 / 令和5年2月

虹のかけ橋

<https://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

生徒指導提要(改訂版)

不登校児童生徒支援のこれから

令和4年12月、生徒指導提要が改訂されました。その中で、不登校児童生徒への支援の目標として、「将来、児童生徒が精神的にも経済的にも自立し、豊かな人生を送れるような、社会的自立を果たすこと」と記されています。また「不登校で苦しんでいる児童生徒への支援の第一歩は、将来の社会的自立に向けて、現在の生活の中で、『傷ついた自己肯定感を回復する』、『コミュニケーション力やソーシャルスキルを身に付ける』、『人に上手にSOSを出せる』ようになることを身近で支えること」としています。そして、「その上で、社会的自立に至る多様な過程を個々の状況に応じてたどることができるように支援することが、次の目標になると考えられます」としています。

今回は、生徒指導提要(改訂版)のポイントである生徒指導の重層的支援構造をもとに、不登校対策や不登校児童生徒支援を確認していきます。

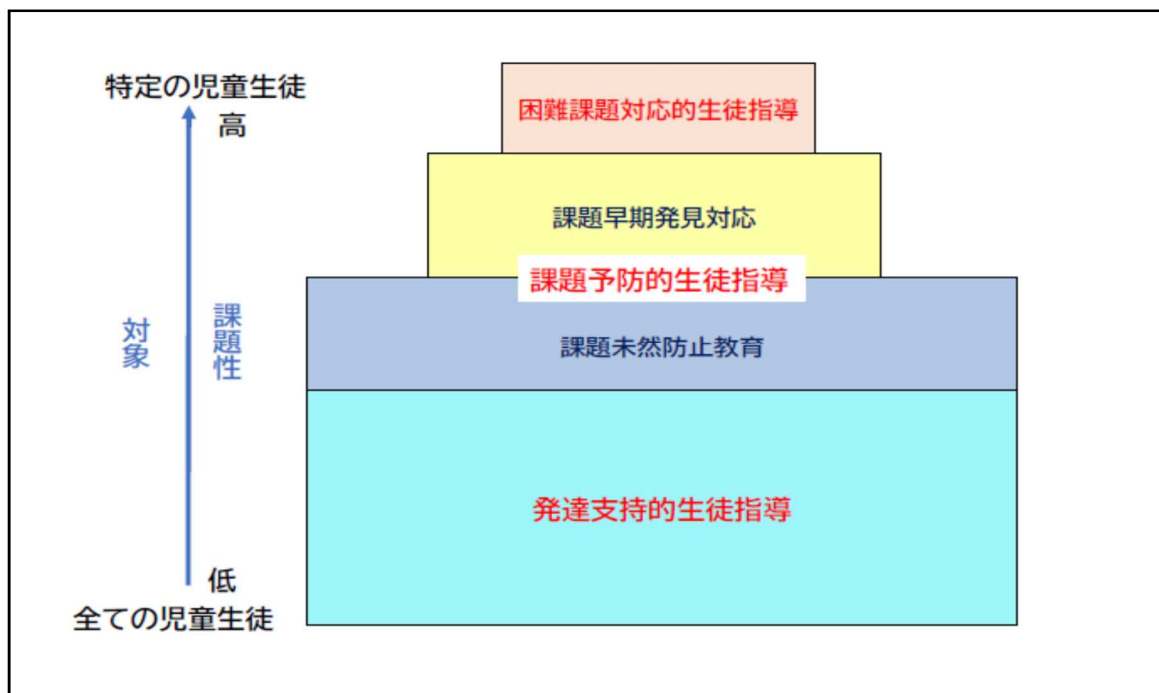


図 生徒指導の重層的支援構造

【参考：生徒指導提要(改訂版)】

不登校対策につながる発達支持的生徒指導

児童生徒にとって学校が安全・安心な居場所となるための「魅力ある学校づくり」と「分かりやすい授業」の工夫をすることなどです。

不登校対策としての課題未然防止教育

児童生徒のSOSを出す力の獲得と教職員の児童生徒の変化に気づきSOSを受け止める力の向上、及び教育相談体制を充実することなどです。

不登校対策における課題早期発見対応

休み始めの段階でのアセスメント（スクリーニング会議）と、教職員、SC、SSW、保護者の連携・協働による支援を開始することなどです。

不登校児童生徒支援としての困難課題対応的生徒指導

ケース会議に基づく、不登校児童生徒に対する家庭訪問やSC・SSW等によるカウンセリング、及び別室登校や校外関係機関と連携した継続的支援をすることなどです。

児童生徒への支援は、「不登校に関する発達支持的生徒指導としての『魅力ある学校づくり』を進めると同時に、課題予防的・困難課題対応的生徒指導については、不登校の原因・背景が多岐にわたることを踏まえた上で適切にアセスメントを行い、支援の目標や方針を定め、多職種の専門家や関係機関とも連携・協働しながら『社会に開かれたチーム学校』としての生徒指導体制に基づいて、個々の児童生徒の状況に応じた具体的な支援を展開していくことが重要」とされています。

一人一人の児童生徒の状況を把握しながら、不登校対応の重層的支援構造をもとに、支援を展開していくことが大切です。生徒指導提要（改訂版）には、さらに詳しく不登校児童生徒への支援について書かれていますので、ご確認いただき、学校における不登校支援の取組や一人一人の児童生徒支援の充実に繋げていただきたいと思います。

参考：生徒指導提要（改訂版）

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1404008_00001.htm



「不登校に関する研修会」報告



「令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、兵庫県の公立小・中学校の不登校児童生徒数は、令和2年度より2,069人増加し、1万1322人でした。不登校の要因・背景は多様であり、児童生徒や保護者との効果的な教育相談、不登校の未然防止、SCやSSW、専門機関との連携、一人一人に寄り添った支援が求められています。

そこで、当所では不登校児童生徒への対応について理解を深めるために、不登校に関する研修会を今年度4回実施し、4名の先生に講義をしていただきました。その一部を紹介します。

第1回

日時・会場：8月8日（月） 兵庫県学校厚生会館

テーマ：「不登校の子どもと保護者の元気を育む会話のあり方」

講師：坂本 真佐哉（神戸松蔭女子学院大学・教授）



児童生徒や保護者との会話では、例外、ゴールを探したり、強さや能力、変化を尋ねたりするなど、解決のストーリーに目を向ける。自信の回復に向けて、家族もリラックスして、何かを楽しむことが大切である。本人のよい変化を探し、本人が好きなことや楽しめることを応援し、会話のできる雰囲気を作る。柔軟性の回復に向けて、生活リズムの改善に取り組み解決することもあるが、元気になり、活動性が高まれば、生活リズムは自然と整ってくる。コミュニケーションの回復に向けて、本当にしんどいことを言語化するのは難しい。言って聞かせるのではなく、相手の言うことに対して、こちらの価値観は一旦棚上げして聞くことが大切である。

<受講者からの感想>

- ・研修を聞いて、私にまだ焦りがあると気づいた。もっと生徒や保護者を理解し、寄り添えるようにしたい。
- ・「どうなれたらよいのか？」という話の切り口での関わりはしたことがなかったので実際に試してみたい。

第2回

日時・会場：8月10日（水） 西宮市民会館

テーマ：「すべての子どもに居場所のある学級づくり

—不登校未然防止のために—

講師：秋光 恵子（兵庫教育大学・教授）



支援を要する子どもには、SCが直接支援を行うなど問題が深刻化するのを阻止する二次的支援を行う。元気がない、学習意欲が低下しているなど、一部の気になる子どもについては、早期に発見し、対応する二次的支援を行う。学校、学級のすべての子どもに対して、心配りをし、一次的支援を行う。先生は児童生徒が、「何とかしてほしい」と思っていると考えているが、子どもは先生に「話を聞いてほしい」と思っており、先生の予測と子どもの回答にずれがある。学級全体への働きかけが、一人一人の子どもの先生への信頼感を育む。また学級の中の一人への働きかけは、全員に対する働きかけとなる。

<受講者からの感想>

- ・児童生徒にとって「先生が話を聞いてくれる。聞いてくれそう」という感覚がとても大事だということがよく分かった。
- ・学級全体への声かけは、一人の児童へ、一人の児童への声かけは学級全体への働きかけになるということを肝に銘じて、言葉、行動、一つ一つに気をつけていきたい。何気ない声かけの大切さを知った。

第3回

日時・会場：8月17日（水） 姫路市市民会館

テーマ：「ソーシャルワークの視点による不登校の子どもへの支援」

講師：野尻 紀恵（日本福祉大学・教授）



包摂の社会を作り出していくために、つまずいている人をどうすれば良いのかを考える必要がある。本人の自己決定を大切にするとともに、セーフティネットを作っておく。環境調整をし、子ども本人に教育を届けることが大事である。環境調整をしていくと、子どもの暮らしのシステムが動き始める。子どもたちは葛藤を抱えている。必要なことは、誰かに受け止められる経験である。抑圧された子どもたちが体験や豊かさを感じると、生きにくさを自分で解消していくことができる。子どもたちは力がある。子どもたちが力を発揮するまで待つ。そのために必要なのがチームアセスメントである。

<受講者からの感想>

- ・伴走するという大切さを知った。この人は自分に寄り添ってくれるという感覚が、腑に落ちた。
- ・自分が思っている以上に子どもたちを取り巻く環境は様々だと思った。他職種の得意な分野を活かすことで、子どもたちのためになることがよく分かった。「子どものパワーを信じる」を大切にしたい。

第4回

日時・会場：10月25日（火） 県立但馬やまびこの郷

テーマ：「一人一人の児童生徒をどのように支援するか
—その子らしく大人になることを支援する—」

講師：小寺澤 敬子（姫路市総合福祉通園センター・小児科医）



児童生徒の支援の目的は、大人になって自分らしく社会生活が送れること、自己肯定感や自己有能感を持てるようにすることである。支援者は、本人が自分を理解していく過程に寄り添っていくことが大切である。青年期以降の支援として、自分をほどよく肯定的に受入れていくこと、自分の感情や行動をコントロールできるようにすること、困ったときに「助けて」と言えるようにすることである。大人になったときの目標は、ほどほどの自尊心を持ち、自分を知り、できない自分も好きと思えること、リラックスできることがあること、何かあったときは相談できることである。

<受講者からの感想>

- ・「できるけど疲れる」という概念がとても納得できた。子どもたちのその気持ちに寄り添いたい。
- ・児童生徒を支援するとは、子どもが自分を理解していく過程に寄り添っていくことだということにとっても共感し、今後の指針となるように感じた。